一光が丘ー NEWS Letter
発行：公立大学法人福島県立医科大学
広報コミュニケーション室
Vol.160 2019年 10月 18日

各診療科での診療を基本に、互いにつながり合うことで診療のレベルを高める

甲状腺・内分泌センター
最も適切な診療に向かうための入り口として

甲状腺・内分泌センター長
横谷　進

【設立の経緯】

2012年10月に「ふくしま国際医療科学センター」の基本構想が策定されましたが、2016年３月に菊地臣一前理事長と阿部正文前総括副学長により「甲状腺・内分泌センター」として組織の考え方が明確にされました。すなわち、その骨子は、①県民健康調査 甲状腺検査の検査担当と診療とを分離し、②診療の窓口を内科系に一本化し、③そのためにふくしま国際医療科学センター内に甲状腺・内分泌センターを新設し診療と研究を担う、というものです。初代のセンター長は大戸斉先生で、2017年４月に横谷が赴任してセンター長を引き継いでいます。

【現在の体制】

「ふくしま国際医療科学センター」に属している甲状腺・内分泌センターは、上述のように研究と診療を担う組織で大学の中にありますが、現在のところ研究を担う体制を持っていません。診療を担う「甲状腺・内分泌診療センター」（以下、診療センター）は病院内の組織です。診療センターを支える職員は、センター長を除いて全員が兼務であり、所属先ごとに人数を記すと、放射線医学県民健康管理センター３、糖尿病・内分泌・代謝学講座10、泌尿器科５、甲状腺内分泌学講座４、臨床検査医学講座２となっています。

実際に目に見えるのは、診療センター外来（2017年１月開設）において甲状腺・内分泌疾患の患者を診療していることです。少なくとも医療連携室経由の新患患者は全員が診療センター外来を初診することになっており、最も適切な診療科に向かうための入り口となっています。入院診療は、各診療科が受け持ちますが、診療センター診療科間の連携の基盤を提供しています。

【現在の活動実績】

同じ甲状腺・内分泌疾患が異なった診療科で異なった方針で診療されることがないように、最も適切な診療が提供できるようにすることが目的です。そのために重要なのが、多診療科によるカンファランスで、2018年度の開催回数は、つぎの通りです。①内分泌内科症例検討を行う「甲状腺内分泌内科カンファランス」49回、②内分泌外科症例と内科症例との情報交換を行う「甲状腺内分泌外科内科カンファランス」20回、③内分泌疾患に対する統合的マネージメントの検討、評価を行う「グランドカンファランス」10回。グランドカンファランスには多数の診療科が参加しており、毎回さまざまなテーマで実施しています（表）。他の診療科での診療や研究成果を知ることができるようになって、診療科間の協力が進んでいます。

県民健康調査 甲状腺検査との関連で言えば、検査自体を担っているのは放射線医学県民健康管理センターの甲状腺検査部門です。甲状腺がんまたはその疑いの診断がつくと、診療側に紹介されますが、その窓口になっているのが診療センターです。診療センターでは、保険診療からの紹介も受けているので、それがどれくらいの人数になるのかを調査して県民健康調査に役立つ情報提供を行ったりしています。

甲状腺・内分泌センターは目立つ存在ではありませんが、各診療科での診療を基本にしてつながりあうことで甲状腺・内分泌疾患の診療のレベルを高めるために貢献しています。

表　2018年度に開催されたグランドカンファランスの概要
現在は原則として第2火曜日17:30から災害医学・医療産業棟7階 会議室2で開催しています

通算回数	開催日		タイトル
1	2018年	5月2日	1）尿中メタネフリンの異常高値を示した睡眠時無呼吸症の一例 2）両側性腺摘除を施行した46,XY先天性副腎リポイド過形成症
2		6月6日	放射性ヨウ素内用療法の適応について
3		7月4日	悪性腫瘍に伴う高カルシウム血症のマネージメントについて
4		8月1日	成長曲線からホルモン作用を知る
5		10月3日	甲状腺と妊娠について
6		10月31日	iPS細胞と内分泌診療
7		12月5日	副腎と性腺 1）前立腺原発セミノーマ（性腺外原発胚細胞腫瘍）の一例 2）最近経験した褐色細胞腫の一例
8	2019年	1月8日	下垂体疾患
9		2月6日	甲状腺の大きさ、バリエーションと異所性胸腺について
10		3月6日	チロシン水酸化酵素阻害剤と褐色細胞腫・パラガングリオーマ診療ガイドライン2018

ベトナムでの疫学研修プロジェクトが、ベトナム アンザン省人民員会の表彰を受けました

ベトナムでは経済の発展に伴い、日本同様に糖尿病や心臓病などの生活習慣病が多くなってきています。本学総合科学教育研究センターの後藤あや教授は、約20年前からベトナム南部での現地医療関係者を対象とした科学的根拠（データ）に基づく医療を推進するための疫学研修プロジェクトに携わって来られました。本プロジェクトは、平成22年度からは、JICA（独立行政法人国際協力機構） 草の根技術協力事業としての認定を受け「ベトナム南部における科学的根拠に基づく患者中心の保健医療サービス向上：大学と医師会の連携イニシアチブ」として支援の輪も広がり、事業を拡大してきました。これが基になり、平成29年には本学と本プロジェクトのカウンターパートであるホーチミン市医科薬科大学との友好協定も締結しました。

これまでにベトナム南部で本プロジェクトによる研修を受けた医療関係者の人数は900人を超え、現地の医療サービスの向上に資する人材の育成と供給に多大な貢献をしています。また、本学学生のホーチミン市医科薬科大学への短期留学や、現地医師の日本での研修受け入れなど、両国間の交流の活性化にも寄与してきました。

この度、後藤教授の南ベトナムにおける、特に研修を地方展開した貢献と功績が認められ、2019年8月に、ベトナム アンザン省の人民委員会から地域社会経済の発展のために貢献したとして表彰を受けました。

アンザン省保健局副所長から
表彰楯を授与される後藤教授

市民公開講座「若い女性で増えているがん～予防するためには～」開催

我が国では２人に1人ががんに罹る時代となってきました。女性では乳房、大腸、胃、肺、子宮の順に罹患率が高く、特に乳がんは11人に１人は罹患すると言われています。一方、子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がんは罹患率は低いものの一旦罹れば子宮や卵巣摘出を余儀なくされるなど、女性にとっては大きな問題になっています。米国では乳がん罹患率は８人に１人と我が国よりも高い罹患率を維持していますが、2003年以降横ばいとなっています。これに対し、我が国では、今後も増え続け、その傾向は2030年代まで続くと予測されています。一方、子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がんは2030年以降も増え続けると言われています。

このように、今も増え続けるがんですが、その基本は早期発見、早期治療、そして予防にあります。がんと向き合うにはどうしたら良いか？この素朴な疑問に対して最先端の情報を提供することを目的に公開講座を企画しました。子宮頸がんワクチンの話もあります。また、子宮頸がんに打ち勝ち、母として、シンガーソングライター・女優として活躍されている松田陽子さんの体験談もあります。多くの方のご参加をお待ちしております。

申込方法などの詳細は下記ホームページをご覧ください。

https://www.fmu.ac.jp/home/fmccw/news/1362.html

小児病棟に「My Special Aflac Duck」を寄贈いただきました

この度、アフラック生命保険株式会社様から、当院の小児病棟に入院している患児に対しアヒル型ロボット「My Special Aflac Duck」を寄贈いただき、令和元年９月26日に当院において贈呈式が執り行われました。

「My Special Aflac Duck」は、治療の辛さはもちろんのこと、自由に遊んだりすることができない小児がんの子どもたちを応援するために、同社が米国で開発したアヒル型ロボットです。このロボットは附属のカードを使って子どもの感情を表現したり、音楽に合わせて踊ったり、優しくなでると嬉しそうにしたりと、インタラクティブな機能が満載されています。

日本では今年の５月から医療機関への提供が始まり、当院は国内で２番目の寄贈先として、55羽を寄贈いただきました。寄贈式では同社社会公共活動推進室の辻田室長からご挨拶とともにダックの使い方が説明され、本学の参加者からは、その愛らしい仕草に感嘆の声が上がりました。当院を代表して、鈴木弘行病院長と菊田敦小児腫瘍内科部長が挨拶を行い、ダックの寄贈のみならず、同社が展開する、がん患者や遺族への奨学金制度や、小児がん研究に携わる医師の米国留学助成制度など、多様な社会貢献活動について感謝の言葉を述べました。

今回寄贈された55羽のダックは、患児１人に１羽ずつ贈呈されます。患児が退院した後もずっとその子に寄り添い、励ましてくれる存在になることと思います。